

ハックとジムのヒーロー像再考

大野成司

序論

1876年7月、マーク・トウェイン¹⁾ (Mark Twain 1835-1910) は前年の夏にすでに着想を得ていた *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) の執筆に取りかかった。しかしその夏、一気に16章までを書いたものの、その後三年間ほどハックとジムのミシシッピー河に放り込んだまま原稿に手をつけずにいた²⁾。その間彼は *The Prince and the Pauper* (1881) や *Life on the Mississippi* (1883) を書き上げたり、その取材旅行をしていた。そしてこの *Life on the Mississippi* という作品が触媒的作用を果たし、彼は再び *Huckleberry* に取りかかるわけだが、以後何回かの中断ののち、最終的にこの作品を書き上げたのは1883年の春であった。

Tom Sawyer's Comrade という副題からも察せられるように、当初、*Huckleberry* は *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) の続編として書かれたと思われる。しかし、創作に長い年月を要したこの作品は、明らかに完成までの過程で変質し、「少年物」という枠をこえてしまった。いかなる解釈のレベルにおいても物語は破綻せず、読み物としての魅力を失わないこの作品は、今なお子供から研究者まで、幅広い読者層を引きつけてやまないのである。これは *Huckleberry* がすべて古典とよばれる作品に共通する重層構造を語り的手法や内在するテーマによって獲得したからである。

しかしこの作品の深さに注目が集まるのは、数少ない例外を除けば20世紀

中頃からである。特に60年代以降は新批評などの台頭に伴って、作品中のありとあらゆるものが考察の対象として取り上げられ、論じられてきた。そして、その内容も楽天的な読み方から、アメリカの理想主義的な思想に反逆するテーマやイメージがより強調されてきた。ところが、それらの多くは細かい分析に重点を置いたり、副次的な解釈を試みたために、トウェイン自身のこの作品に託したメッセージがあまり問題にされなかったように感じられるのである。その背景には *Huckleberry* がもはや文学という領域を脱し、アメリカという国そのものとのアナロジーで語られるほど、アメリカに根ざした偉大な古典になってしまったことも関係している。

そのようなわけで、本論ではシンボルの読み取りといったようなアプローチはせず、作品の核となる主人公ハックの葛藤やハックとジムのかかわり合いを、あくまでも本文に即して検証してみたい。我々は少年ハックの語り口から受ける印象とは裏腹に、容易にこの作品の深さや重みを感じ取ることができ一方、一読したかぎりでは、なかなかトウェインの真意が明瞭に捉えられず、何か釈然としない気持ちを拭いきれない。これは全知全能の神のような語り手ではなく、自己分析すら十分に出来ないハックの一人称というスタイルとジムの黒人奴隷としての寡黙さによって、我々読者が様々なことを補って読まねばならないからである。さらにその言葉の足りなさゆえに全体を通して二人の言動が一貫性を欠いているように見えるからである。ではこの非一貫性は単なる創作上の欠点だろうか。本論はハックとジムを安易なヒーロー像から解き放つことで、そこにいかなる解釈の余地があるのかを考察するのが目的である。そして小論ゆえにその解釈から我々が第一義的に読み取らねばならないトウェインの真意を確認することにとどめたいと思う。

第1章 反発するハック

我々が *Huckleberry* に対していまひとつ釈然としない印象を持つのは、つい *Tom Sawyer* のイメージでもって *Huckleberry* を読んでしまうからであ

ろう。これはある程度しかたのないことであるが、しかしハックとジムの盲目的に英雄視、神聖視しては *Huckleberry* を理解することはできない。つまり行間に隠されたハックの葛藤やジムの苦悩を読み取る必要がある。冷静に観察すればハックの言動はヒーローらしからぬチグハグなものだが、これは主にジムのめぐる葛藤に起因している。重要なことはこの目まぐるしいハックの心境の変化が作品全体を通して認められる点である。ハックをなんとかヒーローに仕立てようとする論考では、31章の地獄行きの決意³⁾を「人間的成長」であるとか「良心の勝利」であると見なし、あたかもハックの葛藤に終止符が打たれたかのごとく論じている。それでは34章以降のトムとのあのジム救出劇⁴⁾はどう考えればよいのか。もしそうだとすれば成長したはずのハックが結末部分で再び人間的に退行することになってしまう。まずここで忘れてならないのはハックがその場その場の思いつきで危機を切り抜ける天才であるということだ。15章のジムへの謝罪の場面⁵⁾や31章の救出決意の場面は見ようによっては確かにドラマチックであるが、そこでのハックの言動は決して深い思慮によるものではない。だからこの部分だけを取り上げて、「人間的成長」「良心の勝利」といったような道徳的な評価をあたえるのは疑問である。

そこでハックの葛藤を理解するには、やはりハックの人物像を正確にとらえる必要がある。ハックの人物像を考える際、我々はどうしても彼の子供離れした能力に目を奪われがちになる。例えば、パップが現れると察してサッチャー判事に自分の金を譲渡してしまったり⁶⁾、自分の脱出を自分が殺されたように偽装したり⁷⁾、南部貴族の件ではソフィア嬢の奇行から色恋沙汰を嗅ぎつけたり⁸⁾、ウィルクス家の件では王様達の魂胆をいち早く見抜いたり⁹⁾と細かいところまで数え上げたらきりが無い。これらはまともな仕事を持たず、酒を飲んで暴れる父親と共にこの世を生き抜かねばならなかったハックが身につけたたかきである。そしてこの境遇については、ハックを分析する際、常に考慮しなければならない点であろう。しかしこの子供らしさを欠いたハックの特異性を認識すると同時にハックが13歳そこそこの少年であるという事実を我々は自明のことだけになおさら心に止めておく必要がある

る。つまりハックをジムを解放せんとする「自由の使者」と見なすのではなく、ごく普通の心優しい少年としてとらえ直して、彼とジムとのかかわり合いを追ってみるのである。

さらに大切なのはハックの心のよりどころを把握しておくことである。ある論考ではハックをなにか特別な神の声を聞くことのできる神聖な存在に祭り上げようとするが、たぶんそれは31章の次のくだりに論拠をおくものと推測される。

And at last, When it hit me all of a sudden that here was the plain hand of Providence slapping me in the face and letting me know my wickedness was being watched all the time from up there in heaven, ...¹⁰⁾

確かにハックは霊的なものを敏感に感じ取る素質を備えている。これは誰もが認めるところであろう。11章ではワトソン嬢によるしつけの後に言い様のない淋しさに震えだし、32章ではフェルプス農場につくやいなや突然、寂寥感に襲われる。しかしこのくだりの神 (Providence) とは決してハックだけがその声を聞くことのできる特別な神様などではなく、知らぬまに身についたセント・ピータースバーグの社会規範であり、またワトソン嬢から教えを受けた道徳なのである。いかにハックが根無し草の浮浪児であろうとも、その社会からなんの影響も受けずにいることはできない。影響を受けないどころかハックには自由州の混血の大学教授に悪態をつく¹¹⁾パップという立派なお手本があったのを忘れてはならない。すなわちハックにもしっかりと当時の社会規範が浸透していたわけである。このようにハックをとらえ直してみると、二人の力関係、両者の立場の推移が明確になり、一見チグハグにみえたハックの一連の言動がある一貫性を持つようになるのである。

ジャクソン島¹²⁾から始まるハックとジムとの関係は最初こそハックの絶対的優位で幕をあけるが、次第にその立場は逆転していく。ジャクソン島でハックがジムを見つけた時、当然ジムはセント・ピータースバーグの連中が

皆そう考えたようにハックは死んだものと考えていた。だから当然、迷信深いジムは目の前にハックが現れて度肝を抜かれる。そのうえ腹をすかしていた彼の前に挽割りのとうもろこしやベーコン、コーヒーさらに調理道具さえも運び込んだために、それこそ魔法の仕業ではないかと呆然とする。しかしジムは徐々にハックの前で本来の姿を見せ始める。小鳥の飛び方で雨を予知する知識¹³⁾、的中する予言や言い伝え、へびに噛まれた傷を治してしまう民間療法やまじない¹⁴⁾等が、ジムによって次々に披露されるのだが、もしハックが真に自由を求める使者であるとすれば、このジムの能力は歓迎されるべきものであったはずである。しかし実際、ハックはジムのこの能力をこころよく思わなかったわけである。それは、つまりハックがよりどころとする社会規範においてジムは人間以下と規定された黒人奴隷なのである。ところが、こともあろうにそのジムがハックの目の前でそのような優れた能力を示すことは白人であるハックの自尊心を大いに傷つけたであろう。そして子供ながらに、ジムより低い地位に甘んずることをこころよく思わなかったのである。そこでハックはガラガラ蛇の死骸をジムの寝床に忍ばせたり¹⁵⁾、ジムの反対を押し切って難破船の探検を敢行したり¹⁶⁾、あるいはジムの無学をいいことにソロモン王の話やフランス語のことをひけらかしたりして¹⁷⁾、子供らしい反発を試みるわけだが、これがハックの優位を示すどころか、ことごとく裏目に出てジムの賢さが際立つ結果になる。にもかかわらずと言うべきか、当然と言うべきかハックはこの社会規範によってインプットされた黒人像を自分の中からそう簡単に取り除くことが出来ないのである。ガラガラ蛇の件ではジムに謝るところか自分のせいであることをひた隠しにし、ソロモン王とフランス語の論争ではジムをやりこめることができないとみるとこんな風に逃げをうつ。

I see it warn't no use wasting words — you can't learn a nigger to argue. So I quit.¹⁸⁾

また難破船の冒険で危険な目にあった翌日、ジムの言う道理にうなづくハッ

クだが、最後に“he had an uncommon level head, for a nigger”¹⁹⁾ とつけ加えることを忘れない。

このように考えてみると15章のジムへの謝罪の場面も前に指摘した通り「人間的成長」とは違ったものになるはずである。

It made me feel so mean I could almost kissed his foot to get him to take it back.

It was fifteen minutes before I could work myself up to go and humble myself to a nigger but I done it, and I warn't ever sorry for it afterwards, neither. I didn't do him no more mean tricks, and I wouldn't done that one if I'd a knowed it would make him feel that way.²⁰⁾

これはジムが立ち去ったあとの心情の吐露である。このセリフにはハック自身の反省よりなによりその「クズ」という自分に投げつけられた言葉の撤回がまず関心の第一にあることを意味している。これはハックの恥の意識に由来するが、ハックがある判断をくださねばならぬ時、この意識は非常に大きなウエイトを占めるのである。これはある意味で子供じみた虚栄心といえる。「謝りに行く決心がつくまで15分もかかったが…」とは黒人は謝罪に値しない存在であるという表明の裏返しであり、「あの時だってジムにあんな思いをさせるとわかっていたらやらなかったであろう」とはジムがそんな風に傷ついたりする心などないと思っていた証拠である。ただし、気をつけなければならないのは、当時の社会通念からすれば、ハックのように思うのが自然であるという点である。そうすると、この場面での謝罪とはジムの人間性を全て認めたいという心からの謝罪というよりは、むしろ社会規範が「物」、「財産」と規定する黒人ジムがどうも自分と変わらぬ人間ではないのかという意識の目覚めと驚きに依拠していたのではないかということだ。そしてこの意識の目覚めが、幸か不幸かこれ以後のハックに重くのしかかっていくという意味において、この場面は重要なターニングポイントと考えてよい。

第2章 逡巡するハック

このように考えると、これから見ていく16章や31章のハックのめまぐるしい心変わりもそう複雑なものでなことが分かる。一言で言えばハックがよりどころとする社会規範、道徳とハック本来が備え持っていた良心とのせめぎあいということになる。ただし、前者がこの時代には途方もない強制力を持っていたこと、そしてしつこいようだがハックが年端もいかぬ少年であったことが理解の鍵になる。特にここで注意すべきことは、いま言った「ハック本来が備え持っていた良心」とハック自らが作品の中で「良心」と称しているものとは全く別物であるという点である。

I tried to make out to myself that I warn't to blame, because I didn't run Jim off from his rightful owner ; but it warn't no use, conscience up and says, every time, "But you knowed he was running for his freedom, and you could a paddled ashore and told somebody." That was so —— I couldn't get around that, noway. That was where it pinched. Conscience says to me, What did poor Miss Watson done to you, that you could see her nigger go off right under your eyes and never say one single word? What did that poor old woman do to you, that you could treat her so mean? Why, she tried to learn you your book, she tried to learn you your manners, she tried to be good to you every way she knowed how. That's what she done.²¹⁾

ここから分かるようにハックのいう良心とはあくまでも社会規範や道徳に基づく良心であり、これに照らせばジムを助けることは当然、罪の意識に結びつくのである。つまり、ジムを救い出すという真に人道的行為がハックにとっ

ては「地獄行き」の行為になるのである。一方、ハック自身の良心とは社会規範の強制力という障害がありながら、それでもなおジムの人間的温かさを感じずにはいられないハックの感性であり、時折見せる彼の無類の優しさのことである。ハックの心のなかでせめぎあう二つの心のありようが同じ「良心」という曖昧な言葉で表現されうるために、ともするとハックは非常に不可解な人物になってしまう可能性がある。

16章ではケイロに近づくにつれて、この罪の意識が頭をもたげ、逡巡が始まる。ただし先程の謝罪の解釈を踏まえれば、ここでのジムに対する突然の嫌悪も了解できる。そして密告を決意したとたんに“*I felt easy, and happy, and light as a feather*”²²⁾とあるのは単なる誇張ではなく、社会規範の強制力の強さ、ハックにのしかかっている重圧を物語っているといえる。ここで最終的にハックが自分に言い聞かせる“*but after this always do whichever come handiest at the time.*”²³⁾という言葉は実質的には、何の解決にもなっていない。したがってジムが王様の手によって売り飛ばされてしまう31章でも結局、同様に逡巡が繰り返されるのである。

次の南部貴族の宿恨のエピソードではジムはほとんど表舞台に現れず、ハックとジムとの関係の主題は宙に浮いたままになるが、これまでのハック像再考のテーマに沿って敢えて言及するとすれば、やはりハックの子供ゆえの身勝手さ、良くいえば無邪気さを指摘することができよう。あれだけハックを悩ませたジムの問題もここではきれいさっぱりと忘れ去られているし、さらにはジムの存在そのものもハックの心の中で希薄になっている。グレンジャーフォード家の使用人の手引きでジムと再会を果たし、ジムが新しい筏を手に入れ、いつでも川を下る用意ができていることを知っても、すぐにジムのところに戻って出発しなかったのは、ハックがジムとのかかわりを潜在的に回避していたと考えられる。ゆえに貴族の撃ち合いに巻き込まれるという抜き差しならぬ状況がなかったとしたら、ハックはきっとこの貴族の館に長居を決めこんだに違いない。

筏に戻ったハックは再び家族を想うジムに人間的感情を発見する。

He was thinking about his wife and his children, away up yonder, and he was low and homesick ; because he hadn't ever been away from home before his life ; and I do believe he cared just as much for his people as white folks does for their'n. It don't seem natural, but I reckon it's so.²⁴⁾

「そんなことはありそうに思えないが、しかし、僕はそうだと思う。」というのはまさに奴隷社会の道德規範に拘束されながらも、ハックがことの真実を認識しかかっていたからである。しかしそこは子供である、残念ながらハックはジムだからこそ、そのような人間的感情があるのであって、それを例外的なことと考える。つまりそれを黒人一般にまで昇華することはできないし、ましてやそれを否定する社会規範そのものに疑いの目を向けることなど思いもよらない。このことは特にこの南部貴族の宿恨²⁵⁾からアーカンソー事件²⁶⁾、ウィルクス家の財産をめぐるエピソード²⁷⁾までのハックの徹底した傍観者的態度にも大いに関係がある。すなわちここで南部貴族あるいは南部社会の虚偽や暴力性を見いだすのはあくまでも我々読者であり、ハックはただ見たままを語る語り手にすぎず、彼自らが社会を批判しているのではないという事実だ。だからこの点を混同していかにもハックが社会批判をしているごとく論ずるのは、明らかに誤りだといえよう。

31章では王様の手によってジムが売り飛ばされるという最悪の事態を迎えるが、ここでのハックの逡巡もやはり「ハックの真の良心対社会規範」という構図に変わりはない。最初に考えついたトム・ソーヤーに手紙で知らせる案は前述した15章のジムへの謝罪の場面と同様にハックの恥の意識、いうなればハックの利己的な部分が優先されて、却下されるのである。

And then think of me! It would get all around, that Huck Finn helped a nigger to get his freedom ; and if I was to ever see anybody from that town again, I'd be ready to get down and lick his boots for shame.²⁸⁾

ただしこの時点におけるハックの中のジム像はジャクソン島の時のそれとは少し違っていて、結局そのジムに対する印象の変化、すなわち筏の上で芽生えたジムとの連帯感がジム救出の決意の決め手となったのは確かである。またハックの偽装殺人のせいでハック殺しの嫌疑がジムにかけていることや、ケイロを通り過ぎてしまったり、カヌーを失ったのは自分がしでかした蛇のぬけがらのたたりのせいだという考えが心の隅にあって、ハックがジムに対して負い目を感じていたことも要因の一つと考えらる。

さて、ここまではハックの目まぐるしい心境の変化を子供ゆえの身勝手さや見栄、弱さというもので説明してきたが、ならば、数々のハックの英雄的行為はいかに考えるべきであろうか。18章ではグレンジャーフォード家とシェパードソン家とが撃ち合いを繰り広げる中、水際に横たわるバック少年の死体を岸まで引き上げ、顔に布を被せてあげる。ウィルクス家のエピソードではペテン師達から金貨を奪い返し、また売却のために離れ離れになってしまう黒人奴隷のことを嘆き悲しむメアリー・ジェーンを見て、つい事の真相を打ち明けてしまう。それから先ほど触れたジム救出の決意そのものも考察の対象として良いであろう。これらの行為を英雄的と称するのは少しおおげさな感じがするが、しかしそれを行うときに背負ったリスクを考えれば、十分にそう呼ぶ資格があるといえる。先程ハックの社会に対する傍観者的態度に言及したが、それはつまりハック自身は奴隷制度をよしとする社会規範や道徳、暴力が日常化した南部社会の偽善、宗教の形骸化といった事柄に対して一切、問題意識を持っていない事を意味した。であるから、これらの行為は別にそういった悪にハック自身が開眼し、仰々しい正義感によってなされたわけではない。そこでこれらの行為を注意深く見てみると、どの場面もハックの非常に個人的感情に基づいてなされていることがわかる。歳の頃も同じでハックによくしてくれたバック少年、ハックには天使の如く映ったメアリー・ジェーン、そして筏での交替の見張りを余計にやってくれる優しいジム。英雄的行為はすべてハックの彼らに対する思いの表明だったのである。大変陳腐な言い方になるが、これこそ第二の良心とも言うべきハックの無類の優しさであり、万事うまく立ち回るトムとは違ったハックの魅力なのであ

る。

If I never learnt nothing else out of pap, I learnt that the best way to get along with his kind people is to let them have their own way.²⁹⁾

これはペテン師二人が筏に転がり込んで来た時のハックの心のつぶやきだが、まさにこの態度がその特異な環境によって身についたハックの現実的な处世哲学である。しかしジムをめぐる逡巡においてハックが社会規範の強制力を感じながらも最終的にジムを助けようとしたその優しさは、このような「触らぬ神にたたりなし」的な彼の生活信条さえも退ける力を有していたのである。冒険を敢行した難破船の中で仲間割れによって殺されかけていた強盗のために敢えて危険な岸へ上がって町の人に知らせたのも、ペテン師達がとうとう町の人達に捕まって、引っ立てられていくところ³⁰⁾にでくわした時、散々な目に会わされているにも拘わらず、同情を寄せたのもまさにこの優しさに他ならない。

以上の考察から推測されるハックの行動原理に従えば、いかにこの先、旅を続けようとも、ハックの逡巡は危機に直面するたびに、堂々巡りを繰り返すだけであり、ハックの最大の武器である優しさはあくまでも個人的感情のレベルで発揮されるのにとどまり、彼に立ちほだかる社会規範とは平行線を辿り続けるだろうと予測される。つまりハック自身がこの社会規範や道徳、南部社会の偽善をはっきりと意識して、疑いの目を向け、抵抗した時にはじめて解決の糸口へと向かうのであるが、とうてい少年のハックにそれを期待することはできない。もちろんトウェイン自身もそのような役割をハックに託すつもりはさらさらなかったのではないか。ハック自らの意志では不可能だからこそ、筏の世界から現実へ向かわせるためにジムがトム・ソーヤーの親戚の農場に売られていたというデウス・エクス・マキナが必要だった

のである。

第3章 仮面の下ジム

ハックに関する非一貫性はジムをめぐる葛藤に起因する彼のチグハグな言動にあったが、ジムに関するそれはジムの描かれ方そのものにある。トムにいたずらを仕掛けられる2章や34章以降の救出劇での道化じみたジムと筏の上でハックに対して父親のごとき威厳を示すジムとは到底同一人物とは思われないほどの落差がある。*Huckleberry* を総合的に論じた中島顕治氏の『「ハック」のアメリカ』ではこのジムの描写について次のように結論づけている。

マーク・トウェインの黒人・奴隷理解はまったくになってない、と結論づけねばなりません。——(中略)—— 彼が奴隷と設定しえたものは、ただ、白人との意識の程度の差が階級の差となっているところ、つまり、理性も知性もなく、お金の意味も知らず、迷信を信じ、魔女に近い、という点で白人と階級的に、絶対に、異なる特徴でした。黒人を描きながら、黒人の心の中には一切入り込めないのですから(存在の構造を感情にまで降下してもその先には進めなかったのと同じく)ふたたび、トウェインは浅薄であるという必要があることになりそうです³¹⁾。

この見解はテキスト中の数少ないジムの身分に関する情報を細かく検討した上で、ジムの奴隷としての描かれ方に現実性が欠如している点に注目している。そして何よりジムの道化的な言動をありのままにとらえている。しかし、本当にジムは理性も知性もない、お金の意味も知らない人物であろうか。

He was saying how the first thing he would do when he got to a free State he would go to saving up money and never

spend a single cent, and when he got enough he would buy his wife, which owned on a farm close to where Miss Watson lived; and they would both work to buy the two children, and if their master wouldn't sell them, they'd get an Ab'litionist to go and steal them.³²⁾

これはケイロに近づいて有頂天になったジムがまくしたてた計画である。この計画が実際どれほどの現実味を帯びていたのかは不明だが、無知蒙昧な人間がここまで考えつくであろうか。またグレンジャーフォード家の使用人達が川で見つけた筏を言いくるめて、取り返した³³⁾あのハック顔負けのしたたかさはどうだろうか。さらに34章では幽閉された場所にトムとハックがあらわれた時、とっさに二人の意図を汲み取って案内した黒人をうまいことだましたあの機転はどのように考えるべきか。こんなところから我々はむしろ旅の途中の筏の上で威厳を示したジムこそが本物のジムであり、危険を承知で逃亡を企てたジムは無知であるどころか、ハック顔負けの知恵としたたかさを持っていたと考えるべきである。

以下そのようなジム像を仮定して、ハックの場合と同様にその変化を追ってみたいと思うが、その前にジムの道化的描写について考えてみたい。無論このジムの道化的描写は、この作品の魅力のひとつであるユーモアを成り立たせる土台になっているわけだが、一方でこれは奴隷社会が黒人に強制する、あるいは期待する黒人像のデフォルメであると考えられる。支配階級はこのような黒人こそ、支配に際して都合がよいのであり、安心していられるわけだ。つまりここに面白おかしく表出された黒人の劣った部分が白人の支配体制を正当化できるのである。だからジムは白人支配の及ぶ場所において常にこの道化的黒人を演じなければならない。そしてそれは否応なく自分を「物」と規定する社会の中で生きていくための宿命なのである。ゆえにジムは自らが置かれている場所や状況によって、道化的なジムになったり、威厳をたたえたジムになったりするるのである。またここで忘れてならないのは、この物語がハックの目を通して語られているという点だ。つまりジムの描写の印象

が場面によって極端に違うのは、まぎれもなくハックの目にジムの演じ分けが映っていたということにほかならないのである。

これでジムが本来の姿を見せ始めたのがジャクソン島（無人島）という、とりあえずは白人支配の及ばない場所であったことが理解できる。そして舞台がジャクソン島からさらに安全な川の上の筏へと移ればこそ、ジムは社会規範の強制力から自由になり、本来の人間味を発揮しえたのである。もちろん、この筏はジムだけでなく岸へ上がる度に嘘を並べ立てるハックにとっても自分自身を偽る必要のない聖域であったことは言うまでもない。

“But mind, you said I wouldn’t tell you know you said you wouldn’t tell, Huck.”

“Well, I did. I said I wouldn’t, and I’ll stick to it. Honest injun I will. People would call me a low down Ablitionist and despise me for keeping mum but that don’t made no difference.³⁴⁾

このようにジムはジャクソン島でさっそくハックの幼稚な忠義心を逆手にとって、彼を抱え込むことに成功するが、これはいくらハックが白人とはいえ、前章で述べてきたようにジムにしてみれば所詮は子供だったからである。

このジャクソン島やそれ以後の旅の中で見られるジムの知識を、中島氏は土俗的であるという理由で一蹴しているが、確かにジムの魔術や迷信、天候予測、占いそのものは非現実的である。しかし実際、ジムの予言が的中したり、へびに噛まれた傷が治ってしまっている点を考えれば、トウェインがこのジムの英知のメタフィジカルな部分に何らかの価値を付与していたと言ってよいだろう。また、中島氏はジャクソン島でのジムの投資の話³⁵⁾を根拠にジムはお金の使い方を知らないと即断しているが、むしろ、この話から白人との程度の差こそあれ、黒人奴隷の世界にも彼等なりの弱肉強食の掟があり、ここで仮定したジムのしたたかさが裏付けられるのではないかと考えられる。

第9章でジムが家の中の死体の正体をハックに明かさなかったのはなぜか。子供に父親の無残な屍を見せたくないという気遣いもあっただろう。しかし同時にジムとしてはこの先の同伴者として白人であるハックを失いたくはなかったはずである。つまり、ハックがパップフィンの死を知れば、ハックの逃避行の必要がなくなるからだ。もともとジムは単独で逃亡を計り、ジャクソン島までは辿りついたものの、飲まず食わずの状態が続くという危機的状況でハックと出会っている。そして幸いにもハックを自分の味方につけることに成功したわけだから、みすみすここで彼を失いたくないと思うのは当然である。黒人一人が筏で川下りをするという危険性を考えれば、白人の同伴者の存在はこのうえなく大きいと言える。それでは父親の死を最後になってジムから教えられたハックがなぜ、ジムに対して憤慨しなかったのか。それはハックのところで論じたように、ハック自身も十分利己的であり、もともと正義感でジムを助けようという意識がなかったからである。

14章のソロモンとフランス語に関する論議は、ジムの無知蒙昧ぶりというより、先に触れたジムの土俗的な知識と同様、ジムの真価があらわされていると考えられる。なぜならば、ソロモンの話では人道的な立場にたつジムのほうに分があるし、フランス語の話では人種という概念を取っ払って、より根源的に人間というものを考えて、ハックの三段論法を撃ち破ろうとする。このようなジムの考え方は一般的な評価や人種といった既成の概念にとらわれているハックの考え方よりある意味ですぐれているといわねばならない。ジムの“de real pint is down furder — it's down deeper.”³⁶⁾というセリフはちょうどこのエピソードの真意のことを言っているかのようだ。

16章でケイロに近づいた時、ハックがジムと一緒にあって喜ばなかったのは、ハックが「自由の使者」でも何でもなく、ただの一少年であるということとで説明した通りである。それではなぜ聖域であるはずの筏の上でハックの罪の意識が頭をもたげたのか、という問題についてここで触れておきたい。これは先程の場所（状況）との関係で説明がつく。つまり、筏がケイロという目的地に近づく（実際には通過していたのだが）につれて、奴隷逃亡の幫助という現実が目前にせまり、心の隅に追いやられていた罪の意識を覚醒さ

せたのである。32章でハックがフェルプス農場につくやいなや、得も言われぬ寂寥感を覚えたのもこれと全く同じことである。つまり、地獄に落ちてでもジムを救い出すと決心したのにもかかわらず、ジムが幽閉されている当の場所にきてみると、事の重大さに恐れおののき、おかしなことに捨てたはずの神に再度すがろうとする、なんとも子供らしい支離滅裂さである。

I went right along, not fixing up any particular plan, but just trusting to Providence to put the right words in my mouth when the time come ; for I'd noticed that Providence always did put the right words in my mouth, if I left it alone.³⁷⁾

19章からはペテン師二人が筏に乱入してくる。筏はジムにとってもハックにとっても自分を偽る必要のない場所であると言ったが、これはあくまでも二人きりの時だけである。いくらハックが話をでっち上げようが、いくらペテン師達がハックの話を信じようが、当然ジムは元の道化的黒人、病気のアラビア人³⁸⁾にならなくてはならないのである。ここにはハックを叱ったあのジムの威厳は微塵もない。

このように見てくると、ハックについてもジムについても、安易なヒーロー的な捉え方でなく、より人間くさい捉え方が理にかなっているようである。それでは批評の上で常に論点になってきたジム救出劇から最後の大団圓の部分では、これが果たして有効であるのかを次章で考察してみたい。

第4章 結 論

結局、舞台が川下りの筏から奴隷制度が厳然と存在するフェルプス農場に移るとジムとハックは自分達が逃亡奴隷とそれを手助けする白人であるという現実と直面する。ハックは社会規範の重圧に押し潰されそうになって勇ましい決心も吹き飛び、ジムは滑稽な道化的黒人に戻ってしまう。ハックが無意識下でジムとのかかわりを回避しようとしていたというのは2章でも指摘

したが、農場を前にして“and then I knowed for certain I wished I was dead”³⁹⁾ という心情の吐露は葛藤を続けるハックというアイデンティティさえも放棄したいという願いといえよう。ただしこれはこの場面に限らず、あらゆるところで偽名を使い、デタラメな経歴をでっちあげる彼の常套手段のうちに自己のアイデンティティ放棄の願望が見て取れる。ところが最後にこの願いはポーリー叔母さんがハックをトムと勘違いすることで叶えられてしまう。つまりこの時点でハックは今しがた勇ましい決心をしたあのハック、筏の上でジムの人間的な温かさを感じ取ったあのハックではなくなり、都合よくトムという別の人間に生まれ変わってしまったのである。だからこそ、この後の残酷極まる（本物の）トムとのジム救出劇をやったのけられたのだ。こうなると、一旦はジムの人間味に触れたものの、結果的には社会規範に沿った黒人観に戻ってしまうことになる。そしてハック本人にとって、そこに戻ることはむしろ大いに心の休まることだったのである。

“It warn’t the grounding — that didn’t keep us back but a little. We blowed out a cylinder-head.”

“Good gracious! anybody hurt?”

“No’m. Killed a nigger.”

“Well, it’s lucky ; because sometimes people get hurt.....”⁴⁰⁾

ここはハックがポーリー叔母さんを相手になんとか話の辻褄を合わせようとする場面だが、安堵したハックが無意識のうちにこのような言葉をはいたのも無理もないことである。さらにトムとの救出方法についての会話の中で、ハックがジムをはっきりとスイカや日曜学校の本といった物と等価に扱っているのがわかる。

“Picks is the thing, moral or no moral ; and as for me, I don’t care shucks for the morality of it, nohow. When I start in to steal a nigger, or a watermelon, or a Sundayschool book,

I ain't no ways particular how it's done so it's done."⁴¹⁾

ハックが自らのアイデンティティを放棄して気楽になった一方、ジムは逃亡奴隷として最大の危機を迎える。いくらトムやハックが救いに来たといっても、所詮彼等は子供にすぎないことをジムは十分承知している。そこで二人の馬鹿げたお遊びにつきあいながら、辛抱強く様子をうかがう。しかし、小屋からの脱出は成功したものの、トムが怪我を負うというアクシデントに見舞われる。ジムがここで逃亡を続けずにトムの看護を選択したのは、彼の単なる優しさや良心の問題だけではなく、もっと冷徹な計算が働いていたはずである。果たしてこの状況で逃げ切れるのかどうか、とどまってトムの看護をしたほうが得策ではなかろうかという打算だ。この行為はジムにしてみればある意味では賭けであったわけだが、結果的には医師の信頼を得た⁴²⁾わけだから、判断は正しかったといわねばならない。

以上のようにハックとジムの人物像を捉え直してみると、はたして物語全体を通して彼等の言動が矛盾することなく、了解することができる。それでは我々はここからまずどんなことを第一義的に読み取るべきなのか。ハックを単なる一少年と見做し、ジムをしたたかな逃亡者と見做すのは、何かこの作品を過小評価しているような感があり、なによりも不粹な解釈のように思われる。しかしこの不粹な解釈にこそトウエインの真意が隠されているように思われる。確かに結末はハッピーエンドの形をとっているが、これはあくまでも「少年物」としての体裁を整えるためである。ジムが最終的に手に入れた自由とは、どんな自由だったか。それはハックやジムの奮闘とは全く無関係なワトソン嬢の心変わり⁴³⁾によってもたらされたものである。この第二のデウス・エクス・マキナというべきどんでん返しの意味は相当辛辣である。様々な拡大解釈はさておき、自由など手に入れようと思ったところで、そう簡単にいくものではないというトウエインの厳しい現実認識を我々は見落とすてはならない。そして否応なくそのことは我々にハックの、そしてジムの自由とはなにかを考えさせるのである。さらに、ハックとジムの友愛、即ち白人と黒人の共生の実現も、またハックやジムが真の意味でヒーローたる所

以である優しさや良識の力も、厳しい現実社会の中では否定的なものにならざるをえなかったということである。そうなるとトウェインの晩年のペシミズムを単に家族の不幸⁴⁴⁾と結び付ける必要はなく、そのような素地は十分にここで見て取れるわけである。

さらに、おおまかではあるがこの解釈をトウェインの創作態度や当時の文学、社会の流れと照らし合わせてみたい。建国以来、アメリカは様々な面において植民地的劣等感を持っていたが、文学においてもそれは一層強かった。それはトウェイン以降の文人達にもそのような考え方が根強かったことから理解できる。しかしトウェインはその土臭い、俗っぽい庶民的な部分を肯定的にとらえようというところから出発する。それはアメリカ文学の独自性をどうにかしてこの風土の中から作り上げていこうとする一種のナショナリズムだが、その傾向は海外での見聞⁴⁵⁾を広げて一層強くなったと推測される。ところが有能なジャーナリストでもあったトウェインは、ただヨーロッパの権威の鎧を剥ぎ取って悦に入るのではなく、次第にアメリカの現実にも目を向ける。そして、ついにはアメリカがその出発点から抱えていた奴隷制度という矛盾に触れざるをえなかったのである。トウェインの真の偉大さはその思想性ではなく、このバランス感覚にあるといえる。彼に思想的深さがなかったという批判がよく聞かれるのは、問題を決して自身の良心や良識の範囲を越えてまで追求しなかったからであるが、これはストーリーテリングという彼のスタイル上の問題もあったであろう。ここがトウェイン評価の分かれ目になるが、これをどのように判断するかは大変難しい問題である。*Huckleberry* が書かれた当時のアメリカはジェファーソン (Thomas Jefferson 1743-1826) らによって民主制が確立してから半世紀程経っているが、まだまだアメリカ人の生活態度は社会的にも宗教的にも保守的であり、偏狭な道徳律の支配下にあったといえる。だから文学ではスコット (Sir Walter Scott 1771-1832) の歴史小説やアービング (Washington Irving 1783-1859) の *The Sketch Book* (1819) といった回顧的なもの、ヨーロッパの伝統に沿ったものが好まれていた時代だったことも考慮しなければならない。

Then comes Sir Walter Scott with his enchantments, and by his single might checks this wave of progress, and even turns it back ; sets the world in love with dreams and phantoms ; with decayed and swinish forms of religion ; with decayed and degraded systems of government ; with the silliness and emptiness, sham gradeurs, sham gauds, and sham chivalries of a brainless and worthless long-vanished society. He did measureless harm ; more real and lasting harm, perhaps, than any other individual that ever wrote.

It was Sir Walter that made every gentleman in the South a Major or a Colonel, or a General or a Judge, before the war ; and it was he, also, that made these gentlemen value these bogus decorations. For it was he that created rank and caste down there, and also reverence for rank and caste, and pride and pleasure in them. Enough is laid on slavery, without farthering upon it these creations and contributions of Sir Walter.⁴⁶⁾

これは *Life on the Mississippi* の中で、スコットをしてアメリカ南部の後進性の元凶であると非難する一節である。この文面も *The Innocents Abroad* (1869) などに見受けられる空とぼけた文章を思いおこすと、どれほど真面目に受け取ってよいものか判断に困るが、おそらくこれもトウェイン流の誇張法なのだろう。つまり、これは単なるスコットに対する個人攻撃ではなく、そのような小説に感化されてしまう人間の愚かさ、浅はかさに対する憤り、やるせなさも含まれているのである。

従ってこのような状況の中でトウェインはメルヴィルやホーソンといった先人達が道徳的批判を免れるために無難なシンボルを使いながら、自身の心の内を語ろうとしたように伝統的なピカレスク小説の手法と少年物という

体裁を巧みに利用して、トウェイン自身の厳しい現実認識をオブラートに包んでみせたのである。そして、このピカレスク小説の手法と少年物という枠組は二つの利点をもたらしたといえる。まずこのハック少年の一人称という設定は、晩年の作品がその剥き出しのペシミズムによって文学的には野暮なかたちで終わっているのに較べ、ここではトウェインの影が作品の中にちらつくのをうまい具合に抑えている。また少年物という設定は例のデウス・エクソ・マキナを自然なかたちで取り込むことを可能にしている。まして南西部のユーモア小説は荒唐無稽を主題としていたわけだから、当時の読者にとっても抵抗はなかったはずである。彼が自分の作品を典型的な北部育ちの妻の検閲にかけていたことや、晩年のあまりに反キリスト教的な作品の出版を遺族のことを配慮して差し控えたりしていたことは有名である。これはトウェイン自身が当時の社会規範に制約されていたということになるが、それはまた、良識ある一人のアメリカ人として人生を全うしようとした彼の信念でもあったのであろう。

NOTES

- 1) マーク・トウェインはペンネーム、本名は Samuel Langhorne Clemens である。
- 2) 16章で筏は蒸気船と衝突、ハックとジムは川に放り込まれる。
- 3) “All right, then, I’ll go to hell” ハックが農場に売られてしまったジムを助ける決心をする。
- 4) 幽閉されたジムを囚人にみたてて、芝居仕立てに救出する。
- 5) 霧のために離ればなれになった二人が再会したときに、心配するジムの気も知らず、ハックはからかってジムを怒らせてしまう。
- 6) ハックは自分の六千ドルに目をつけてパップがあらわれたと察して財産を判事に譲ってしまう。4章
- 7) 豚の血を滴らせたり、自分の髪を斧につけたり、地面に引きずった跡をつけたりと手の込んだ偽装をする。7章
- 8) ソフィア嬢に教会に忘れてきた聖書を取ってくるよう頼まれるが、聖書に挟まれていた紙切れを見てしまう。18章
- 9) ウィルクス家の事情を土地の若者から根掘り葉掘り聞き出す王様をみてハックはとっさに魂胆を見抜いた。24章
- 10) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (New York: St. Martin’s,

1995) p.201.

- 11) 酔っぱらったパップは町ででくわした市民権を持つ黒人の大学教授のことを散々罵る。6章
- 12) 二人の逃亡者はジャクソン島でばったり出会う。8章
- 13) ジムの判断で岩穴に移動し、そのために雨をしのぐことができた。9章
- 14) ジムは四日四晩床についていたが、再び元気になった。10章
- 15) ジムを驚かせようと殺したガラガラヘビをジムの寝床にしのばせる。10章
- 16) ハックはしぶるジムを連れて岩に乗り上げた蒸気船の探索に出かける。12章
- 17) 聖書のソロモン王やフランス語をめぐって二人は論議する。14章
- 18) Mark Twain, *Huckleberry* p.95.
- 19) Ibid., p.92.
- 20) Ibid., p.100.
- 21) Ibid., p.101.
- 22) Ibid., p.102.
- 23) Ibid., p.104.
- 24) Ibid., p.155.
- 25) 対立する南部貴族のいざこざに巻き込まれる。17章~18章
- 26) ボッグズという酔っぱらいがシャーバンという店主に撃ち殺される。21章
- 27) 王様と公爵がウィルクス家の財産を横取りしようと企む。24章
- 28) Mark Twain, *Huckleberry* p.201.
- 29) Ibid., p.131.
- 30) ハックはペテン師二人を縛り上げ、リンチにしようと大騒ぎしている町の人々とでくわす。33章
- 31) 中島顕治『「ハック」のアメリカ』（山口書店、1991年）、p.126.
- 32) Mark Twain, *Huckleberry* p.102.
- 33) グレンジャーフォード家の黒人奴隷が川で見つけた筏をジムがうまくいくるめて取り返す。18章
- 34) Mark Twain, *Huckleberry* p.65.
- 35) ジムが家畜の事業や銀行に預けて損をした話をハックに聞かせる。8章
- 36) Mark Twain, *Huckleberry* p.94.
- 37) Ibid., pp.206-7.
- 38) 公爵はジムを縛りつけておくかわりに、芝居用の衣装をつけさせ、身体中を絵の具でぬり病気のアラビア人に仕立てる。24章
- 39) Mark Twain, *Huckleberry* p.206.
- 40) Ibid., p.208.
- 41) Ibid., p.228.